

シリーズ「遺跡を学ぶ」

167

縄文編みかご の世界

東名遺跡

西田 巖

新泉社



縄文編みかごの世界

— 東名遺跡 —

西田 巖

【目次】

第1章 地中深くに貝塚が	4
1 奇跡の発見	4
2 居住域の調査（一次調査）	7
3 湿地性貝塚の調査（二次調査）	15
第2章 縄文のタイムカプセル	21
1 奇跡的にそろった三つの環境	21
2 居住域の遺構	23
3 貝層を調べる	26
4 貝塚に残されたもの	32
5 湿地に残されたもの	40
第3章 縄文編みかごの世界	47
1 列島最古・最多	47
2 徹底的に調べる	56
3 編みかごの復元	59
4 復元からみえてきたこと	65
第4章 東名縄文ムラ	67
1 東名縄文人	67
2 生業の移り変わり	71
3 ものづくりの広域交流	79
4 変動する環境を生きぬく	82
5 東名縄文人たちはどこへ	83
第5章 東名遺跡のこれから	88
1 東名遺跡の保存	88
2 東名遺跡のこれから	90
参考文献	93

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵



図1 ● 巨勢川調整池の底にあらわれた貝層

上：広大な調整池の内部は5m掘削されている（遠方に草の生えた土手がみえる）。発見時の第2貝塚は一部、掘削工事で破壊されている。
下：発見時の第3貝塚。貝殻がびっしり詰まった貝層が露出している。

第1章 地中深くに貝塚が…

1 奇跡の発見

地下五メートルの貝塚

「うわあ、すっ、すごい！」「あっ、ここにも、ある！」

二〇〇三年五月、わたしと当時嘱託職員だった黒木正行君は、貝殻が集中して散乱する箇所をつぎつぎとみつけた。縄文土器や石器、動物の骨も含まれている。縄文時代の貝塚だ。しかも、土器をよくみると縄文時代早期のものだ。

ここは治水対策用の巨勢川調整池建設工事で地下五メートルまで掘削されていた場所。作業はいったん休止していたが、さらに掘削を継続するために溜まっていた水を排出し、底が露出した状態になっていた。水に洗われた貝層が露出し、容易に確認することができた（図1）。

これが国内最古、最大級の湿地性貝塚発見の瞬間である。埋蔵文化財の仕事をはじめて一五

年目のわたしも、さすがに興奮し身ぶるいしたのを憶えている。

きつかけは作業員さんの情報

ここを検分することになったきつかけは、別の現場の発掘調査をしていた作業員さんの情報だった。

一年前の二〇〇二年四月にさかのぼる。調整池の建設を管轄している国土交通省佐賀河川総合開発工事事務所（以下、佐賀河川事務所）から「貝殻が露出している」という一報を受けた。場所は、貝塚を発見したところから西に三〇〇メートルほど行った地点。水路建設のため現地表面から一〇メートル以上掘削されていた法面に、貝層が数十メートルにわたって帯状に露出しているのが確認できた。

工事はそれ以上掘削しないこともあり、「ひさ久富二本杉遺跡」と名づけ、遺跡の内容と範囲を



図2 ● 久富二本杉遺跡の調査

写真中央、手前の水路の法面に4本のトレンチを設定して調査。貝層の堆積状況から時期は縄文時代早期後葉で、貝塚本体ではなく、流水の影響によって貝塚からの貝殻が移動して二次的に堆積した貝層と判断できた。トラックが3台止まっている堤防の右上が調整池本体。

確認するための調査をおこなうこととなった（図2）。そして、この調査に来ていた作業員さんから、「調整池のなかで魚を捕っていたら、ここと同じように貝殻が散らばっているところがあった」と聞き、まさかと思いつながら黒木君と現地へむかい、冒頭に記した発見にいたったのである。

たまたま掘削工事が貝層上部を少し削る高さ（地下五メートル）でいったん止まり、近くの現場で発掘していた作業員さんが貝殻の散らばりを偶然みつけなければ、貝塚は発見されることはなかった。まさに奇跡の発見である。しかし、「一次調査区（居住域）」と同時に発見されれば、すごい遺跡になったであろうに……」という後悔にも似た気持ちがかみ上げてきた。じつは、発見した貝塚のすぐ近くで、縄文人の生活の痕跡をすでに発掘していたのだ。

2 居住域の調査（一次調査）

大規模な治水工事

ここは佐賀平野の中央部（図3）。北の福岡県との県境となる脊振山系から南へ派生する台地が低地に移り変わる境付近に立地する。平坦な土地が広がり、大部分が水田に利用されている（図4）。調整池のために掘削しなければ、縄文時代の遺跡があるなんて想像もつかない。

佐賀平野は、古くから有明海の潮汐の影響によって河川や排水路が水をさばききれなくなつて溢れる内水害が発生し、一九七〇年代以降は都市化による水質の悪化も問題となっていた。

おける遺跡の確認調査で、地表下1・5〜2メートルの地点（標高三メートル前後）から、縄文時代早期の遺物包含層が確認された。

きっかけは対象地を斜めに横切っていた黒川の浚渫土のなかで発見した縄文土器だった。その土器はほとんど摩耗していなかったため、周辺に縄文遺跡が存在する可能性が浮上した。そこで追加のトレンチを設定し、再調査した結果、確認されたのだ。

佐賀県内では縄文遺跡の確認例は少なく、ましてやこのような低地に縄文時代の遺跡が存在することは異例だった。なぜ、このような低地に縄文時代の遺跡が存在するのかなどは解明されないまま、土地の名から「東名遺跡」と名づけ、開発側である佐賀河川事務所と遺跡のとり扱いについて協議した。その結果、現地保存はむずかしく、一九九三年四月から記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。



図4 ● 東名遺跡周辺の景観（2006年撮影）
中央に巨勢川調整池の建設が進む広大で平坦な水田地帯。上方の山並みは脊振山系。8000年前の地形景観はまったくわからない。

そこで、建設省（現国土交通省）は、筑後川（福岡県境）から嘉瀬川までの流況を調整する佐賀導水を計画し、その一環の治水施設として調整池の建設を計画した。調整池周辺は江戸時代初期の治水事業によって遊水地帯（千布沖田）となっており、遺跡の存在はまったく知られていなかった。

ところが、一九九〇年におこなわれた調整池建設予定地に

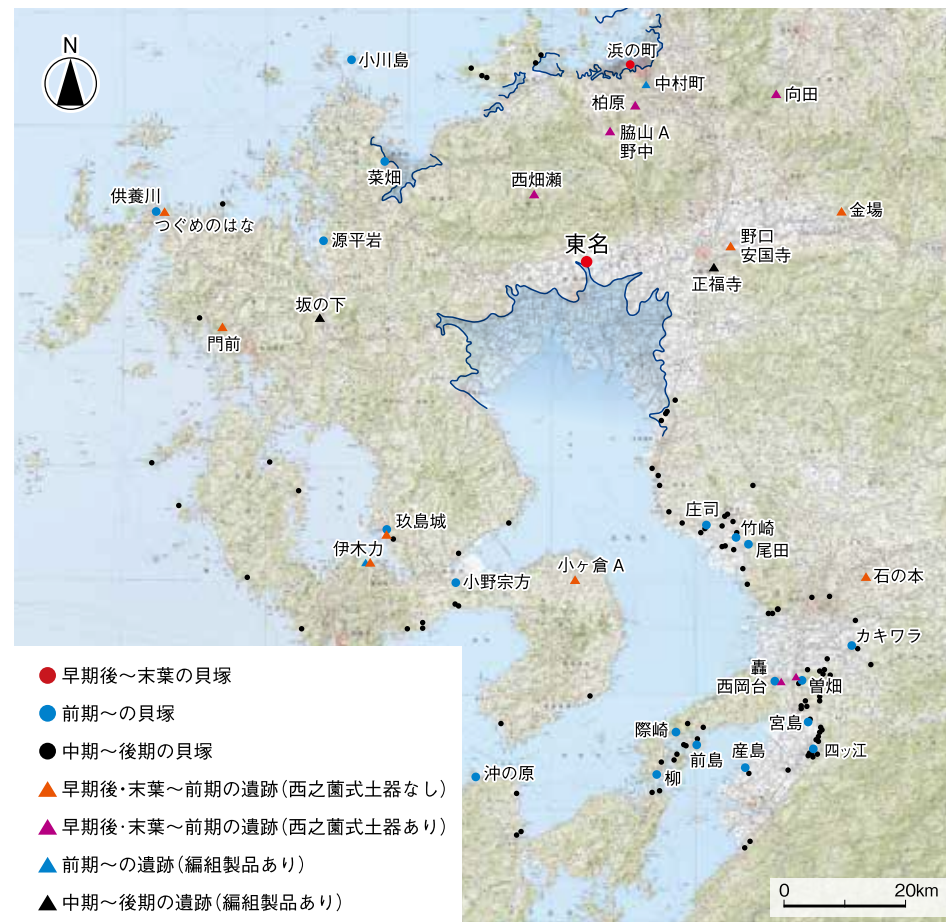


図3 ● 東名遺跡の位置と西北九州・有明海沿岸の主要縄文遺跡
青線は縄文海進ピーク時期の海岸線。公表されている地域のみ示したが、諫早、熊本、八代地域なども内陸まで入り込んでいたと考えられる。

水との闘い

当時佐賀市では、ほかにも大規模調査を予定していたため、職員になって四年目のわたしが調査を担当することとなった。縄文遺跡の調査経験はなく、ましてや謎だらけの遺跡を担当することになって、正直気が進まないまま調査を開始することとなった。

まず出土遺物の量や掘削土量などの情報を得ることを目的とした予備調査から開始した。

その結果、包含層中の遺物量が予想を上まわることが判明し、新たに集石遺構もみつかった。予定されていた単年度での調査完了は困難であり、佐賀河川事務所と協議を重ねながら、最終的に三年間という長きにわたり調査することとなった。

現地は湿地帯で調査は難航した。雨期には現場へ行く途中の進入路まで冠水し、毎年一カ月程度の調査中断を余儀なくされるほどだった。とにかく排水処理が調査進捗の鍵を握っていた。そのた



図5 ● 1次調査の状況

湧水のため道板を交互にならべ、その上の上り下り調査している様子。直接土の上ののると足が沈み込み、遺物が原位置から動いてしまうために必要な作業だった。

め調査区周縁の調査を先行し、そこを排水路として確保したうえで大型ポンプを設置した。その後、排水問題はかなり改善されたが、それでも遺物包含層の掘削が進んだ下部では、湧水のため道板を交互に並べて調査せざるをえなかった(図5)。

遺物包含層の調査は五センチずつ掘削し、出土した遺物の三次元情報を記録したうえでとり上げるという作業を繰り返していった。

遺物は泥まみれで量も多く、土器、石器、礫もその場ですばやく区別することはむずかしかったため、すべて連番でとり上げた。とり上げた遺物の洗浄は現地の横を流れていた黒川の水を使用し、現地調査と並行しておこなった。そして乾燥させ袋詰めする前に、土器、石器、礫などの種別を台帳に記録していった。

記録作業は、現地作業が終了した夕方、乾燥させている薄暗いテントのなかで毎日のようにおこなった。来る日も来る日も同じような作業がえん



図6 ● 塞ノ神B式土器

口が開いた平底のバケツのような形の土器。ハイガイなどのフネガイ科の二枚貝で文様をつけているのが特徴。

えんと続き、変化のない調査に正直嫌気がさした。一九九六年八月の調査終了まで、埋葬人骨が発見されるなど多少の変化はあったものの、本当に忍耐が必要な三年間だった。

定住生活を予感させる遺物・遺構

最終的にとり上げた遺物は約二一万点と膨大で、定住生活を予感させるものであった。その後の分類作業には長大な時間を要した。内訳は土器約四万四〇〇〇点、石器約四万三〇〇〇点、人為的にもち込まれた礫約一二万点を数えた。

土器のほとんどが早期後葉の塞ノ神B式土器(図6)で、少量ではあるが早期中葉の押型文土器や早期末葉の轟A式土器が含まれていた。

遺構は、集石遺構一六七基、石器集積遺構一九基、八体分の埋葬人骨を確認した。集石遺構は構成礫の大きさから二種に大別され、加熱により赤化した礫が数多く出土した(使用法は第4章でみる)。石器集積遺構はサヌカイト剥片の集積がもつとも多かった。埋葬人骨は、縄文時代早期という点で全国的にみても希少価値が高く、いずれも屈葬状態で検出された(図7)。一〇メートル四方ほどの範囲に集中しており、墓地が形成されていた可能性が高い。

このように一次調査の成果は、縄文遺跡の希薄な佐賀平野はもとより、北部九州の縄文文化のあり方を考えるうえで非常に重要な資料となった。しかし、なぜ縄文人がここに生活の場を設けたのかは発掘調査中からずっと疑問に思っていた。それが後に貝塚が見つかることで、ようやく疑問に思っていた遺跡立地の謎が解けることになる。

地中深く埋もれた縄文人の暮らし

九州大学の下山正一氏が作成した縄文海進最盛期の海岸線復元図(図8)と、貝塚周辺でおこなった確認調査の結果および調整池建設にもなうボーリングデータを重ね合わせると、八〇〇〇年前の旧地形が浮かび上がってくる。

当時の東名遺跡は、海岸線がもつとも内陸に入り込んだ河口付近で、脊振山地からのびる丘陵の先端付近に立地していた。



図8 ● 縄文海進最盛期の海岸線
縄文海進がピークに達したころ(いまからおよそ7000年前)の海岸線を復元したもので、当時、東名遺跡は大きな河口付近に立地していた。



図7 ● 埋葬人骨のとり上げ
3体同時に埋葬された人骨。板枠をとりつけ柱状に残した土を切断しているところ。この後、底にコンパネを差し込みとり上げた。

氷期の最盛期がすぎ、約一万六〇〇〇年前から世界的な温暖化が徐々にはじまった。そのため七〇〇〇年前までに海面が一〇〇メートル以上上昇、海水が陸地の奥深く進入し、複雑な海岸線をもつ入江が多くつくられた（縄文海進）。縄文人たちは、海の幸を求めて東名の地に約八〇〇〇年前に住み着いた。そして定住し、貝塚を築いていた（図9）。

そうした暮らしも、約七四〇〇年前以降、高温多雨による土石流や急速な海面上昇による浮泥の堆積などにより土砂で埋没してしまう。傾斜面にあった貝塚の上部には五メートル以上の土砂が堆積し、元の地形の凹凸を埋めつくしてしまった。

現在みられる広大で平坦な地形（低平地）は、約七〇〇〇年前にはほぼ完成していたと考えられる。佐賀平野周辺ではその

後、弥生時代に入るまで貝塚が形成されていない。海面上昇などによって形成された広大な干潟や湿地は、縄文人たちにとって利用がたい環境だったのだろうか。その後七〇〇〇年ものあいだ、縄文人の生活の痕跡は地上にいつさい残さず眠りつづけた。それが調整池建設の掘削工事によって、突然わたしたちの目の前に姿をあらわすこととなったのである。

3 湿地性貝塚の調査（二次調査）

発見された貝塚のとり扱い

二〇〇三年五月に露出した貝塚を発見した後、七月十一月にかけて貝塚が発見された調整池北半部を中心に調査し、四地点（第二、第五貝塚）で貝塚の存在を確認した。この間、佐賀河川事務所とは協議を重ねていた。すでに確認調査および本調査（一次調査）をおこなって開発を許可した場所であったにもかかわらず、真摯に対応していただいた佐賀河川事務所の方々に感謝の言葉しかない。

協議の結果、標高三メートルまで常時貯水する可能性があったこと、工事計画掘削をまぬがれない箇所があること、貝層が露出した状態での現状保存は困難と判断されることなどから、すべての貝塚について本調査を実施し、記録保存で対応することとなった。調査は、これまでの経緯をふまえて筆者が担当することとなった。個人的には縄文時代は専門ではなかったが、縄文時代早期の大規模な貝塚であり、不安よりも調査への期待のほうが上まわっていた。

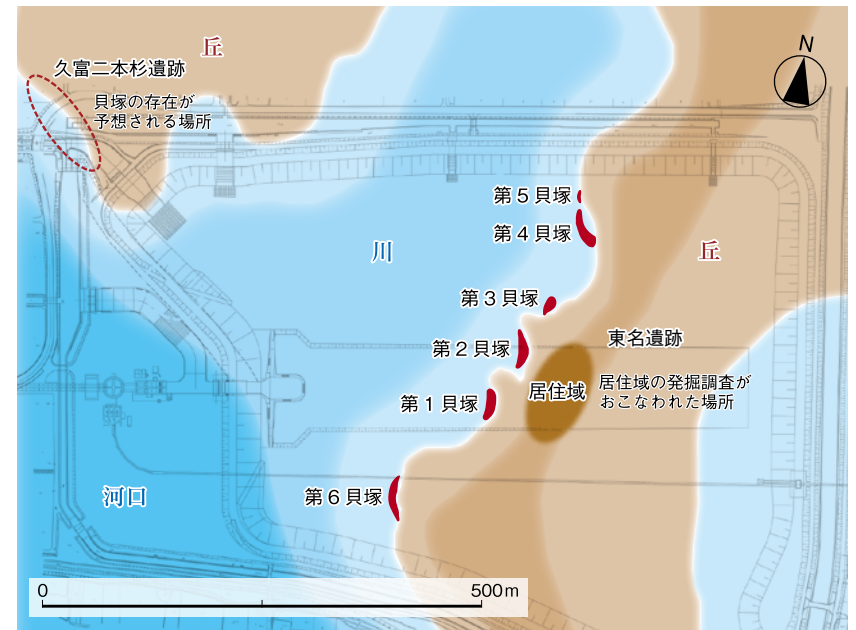


図9 ● 東名遺跡周辺の旧地形
丘陵地の先端に集落をいとなみ、傾斜面に6つの貝塚が形成された。東名遺跡の対岸には久富二本杉遺跡がある。確認はできなかったが、丘陵地の他地点にも居住域があった可能性がある。

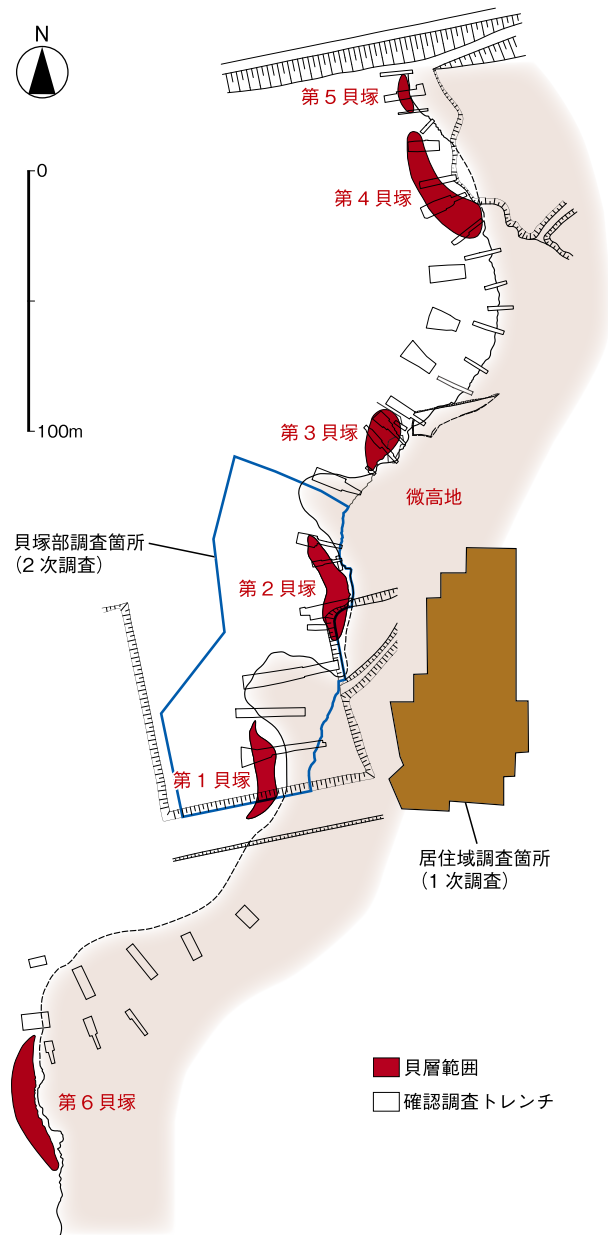


図10 ●第1～第6貝塚の位置図
予備調査によって第1・第6貝塚が新たに確認された。

たつては排水が大きな課題であったが、佐賀河川事務所との協力で現地に電源を引き込んでもらい、三インチの排水ポンプ三基を設置した。これで常時排水することができるようになり、ドライの状態での調査することが可能となった。

貝層の調査については、西日本で大規模な貝塚調査がおこなわれていた滋賀県の粟津湖底遺

拡大する貝塚群

まずは貝層の規模および調査方法・期間・費用を明確にするための予備調査を二〇〇四年五月から九月にかけておこなった。同時に「東名遺跡群調査指導委員会」を組織した。佐賀市ではじめて設置された調査指導委員会、会長は熊本大学の甲元眞之先生にお願いした。調査が無事に終了できたのも、この委員会のおかげである。

予備調査の結果、貝塚だけでなく貯蔵穴や編みかごが見つかった。調査量は膨大になる。さらに、新たに貝層が露出していなかった第一貝塚を確認した。また、掘削工事が完了した調整池南半部で貝層が露出した第六貝塚を発見した。みるみるうちに貝塚群が拡大していった(図10)。最終的に、旧微高地の傾斜面に形成された六つの地点貝塚を確認した。貝塚の延長は約五〇〇メートル、総面積は約一七〇〇平方メートルにおよび、縄文時代早期段階では西日本最大級の貝塚群となった。

この予備調査の結果をもとに佐賀河川事務所と協議し、調査費の増額や調査期間の延長などの対策がはかられた。ただし、調整池建設事業は二〇〇八年度完了予定であり、この段階で拡大した貝塚群の調査を事業に合わせて完了させることは困難だった。そのため記録保存の調査(発掘調査)と並行して現状保存の方法を検討することとなった。

編みかごの発見

本調査は、工事工程上さらなる掘削をまぬがれない第一・第二貝塚から実施した。実施にあ

制約のため二〇〇五年度から調整池敷地内に仮設プレハブを建て、現地調査と並行して実施した(図20参照)。現地調査の作業員は五〇人程度、ピーク時の整理作業員の数は三〇人を超えていた。

この大所帯をなんとか運営し、迅速性を追求しながらも緻密な作業を



図12 ● 2次調査の状況
上：第2貝塚の貝層とその下部に広がる粘土層調査の様子。
下：貯蔵穴のなかに残っていた編みかご検出の様子。

上げには、細心の注意を払う必要があり、想像以上の労力が必要となった。

調査体制の強化が急務となった。そこで担当職員二人以外に、調査員二人、調査補助員三人(測量中心)を民間委託により確保し、さらに嘱託職員三人を採用した。整理調査も時間的な

貝層調査にもまして、湿地調査の比重がしだいに高くなっていった。貝層についてはある程度作業量の計算はできたが、粘土層から出土する植物性遺物は、脆弱なうえ日本最古級のものばかり。その検出ととり

跡の調査方法を参考にした。貝層を中心に地形に沿うように五メートル間隔のトレンチを設定し、断面で堆積状況を確認しながら、それを平面的に広げ、一層一層、上層から順番に掘削していく方法だ(図11)。

調査指導委員会の松井章委員の紹介で、栗津湖底遺跡の調査員であった伊庭功さんに現地で指導・助言を受けたことは非常に心強く、大いに参考となった。

ところが、いざ調査を開始すると、貝層よりも低い位置に堆積している粘土層から予想をはるかに上まわる貯蔵穴や編みかご類が出土したのである(図12)。



図11 ● 第2貝塚調査区の全景
上方中央にうっすらと白く三日月状にみえるのが貝層。右端は掘削工事によって消失していた。5m間隔で先行トレンチを入れ調査している。下方が貝層より低い位置の粘土層側。

おこない、いかに調査成果をあげるかという課題にとり組んだ。一方で調査の進展とともに、日本最古、最古級の発見が相次ぎ、遺跡の重要性が高まると同時に調査の作業量も増加していった。

工事計画に合わせた調査完了の可能性も日に日に低くなっていき、調査工程についていくどとなく佐賀河川事務所と協議し、そして二〇〇五年一月、ついに調査未着手の第三〜六貝塚について現地保存をすることで話がまとまった。

二〇〇六年度から、調査と並行して保存対策工事が施工され、現地調査は第一・第二貝塚を対象に完掘にむけて急ピッチでおこなわれた(図13)。調査レベルを落とすことなく、最終段階では休日返上で作業し、なんと二〇〇七年八月末に現地調査を終了することができた。こうして三年半の長きにわたり悪戦苦闘した二次調査によりやく終止符を打つことができた。



図13 ● 発掘調査と保存対策

急ピッチで発掘調査が進む第1・第2貝塚(手前)。
保存対策工事が進む第3～第5貝塚(奥側)。